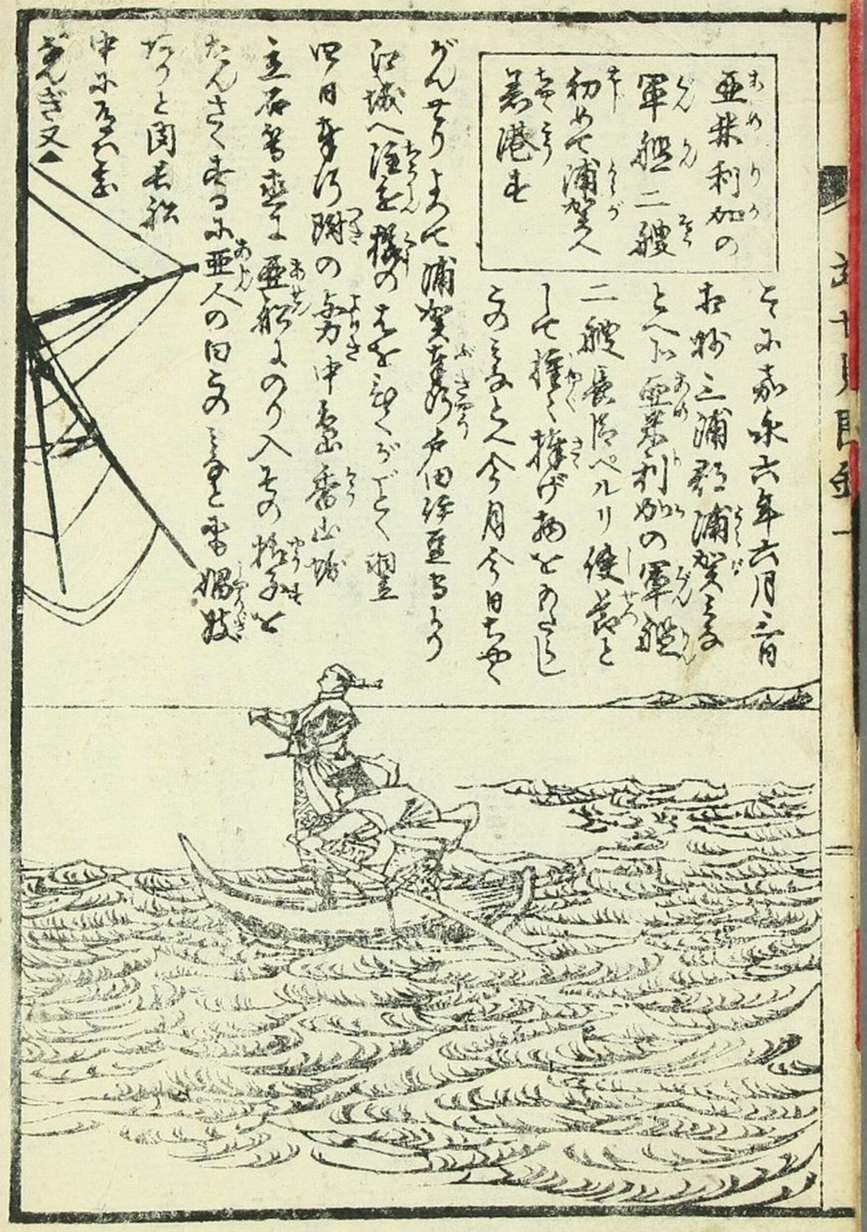
近世見聞録初号
編輯石井善内
真雪年信

A458

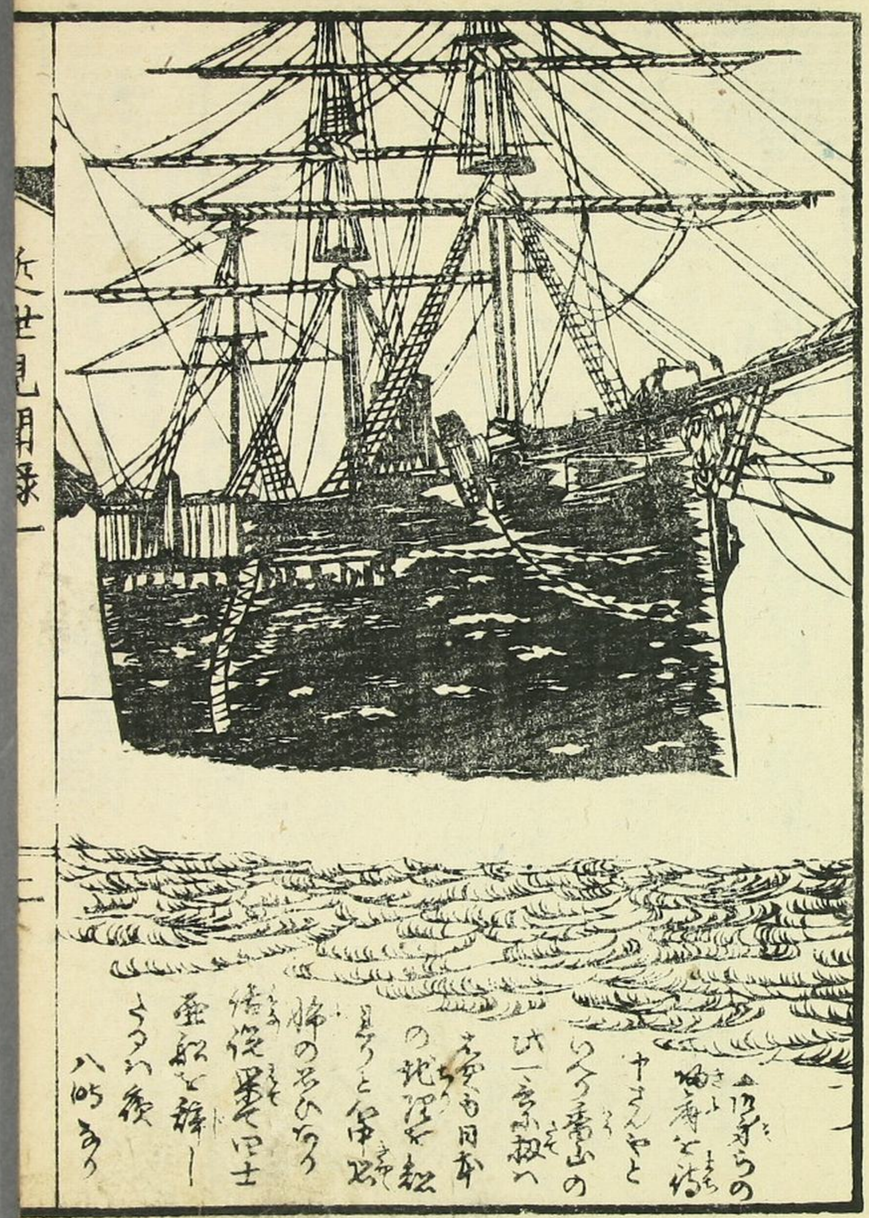
亜米利加合衆国の水師提督ペルリの肖像

48-8073

亞米利加の軍艦二艘初めて浦賀へ来港せ

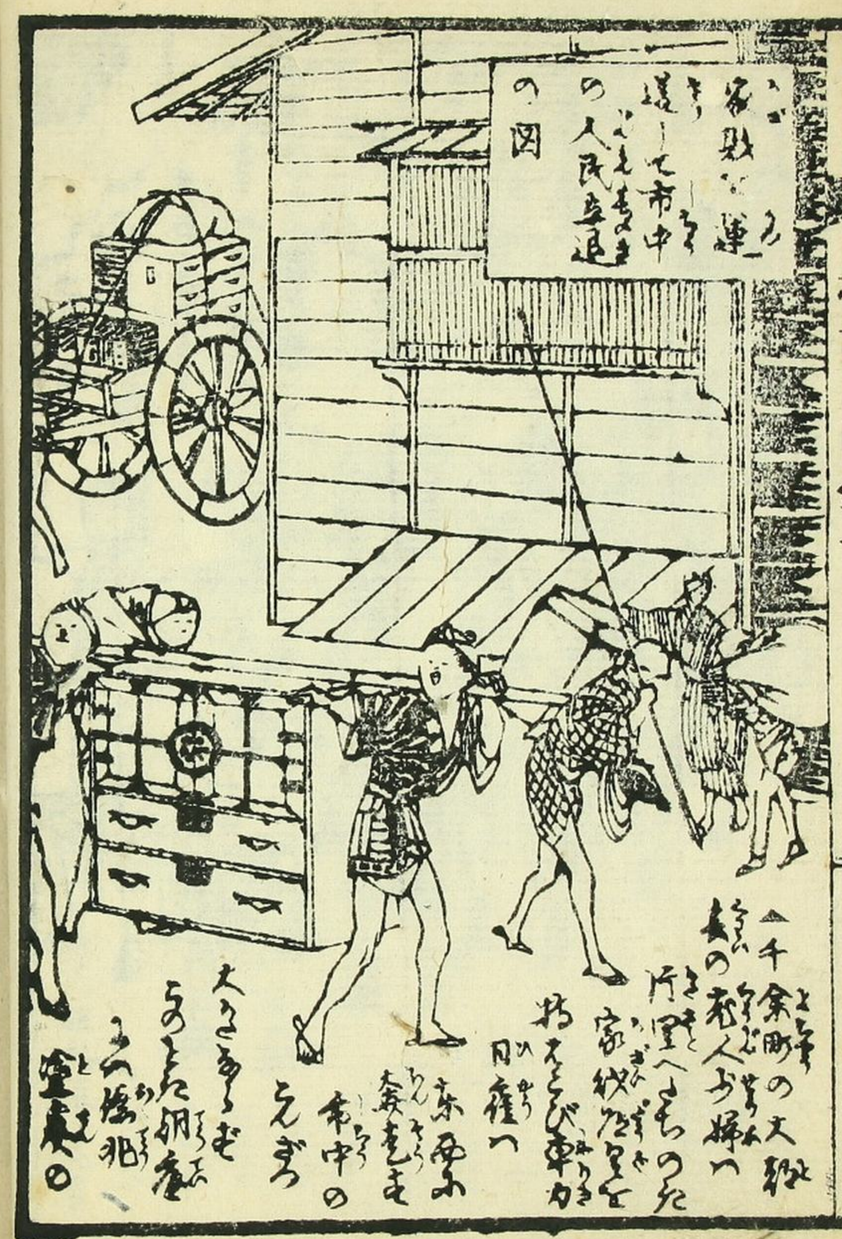


そもそも嘉永六年六月六日
おもの二浦賀浦へ
とへ亞米利加の軍艦
二艘長崎ペルリ使者と
して指ゝ指げあとのこと
このゝちと今月今日ちゆく
ぐんせうよりて浦賀へ
江城へ注進の
四月廿五日の夕中番山城
主石谷豊前守殿より入
たんさくまるふ亞人の
なりと関西紅
中ふるえ
ぎんぎ又



四月廿五日の
夕中さんやと
いろう番山の
はい一ぶ叔へ
ぶ城も日本
の地理や紅
まりと伊豆
沖のちひろ
清俊墨で四士
亞紅と舞
ようい後
八時ゆり

海岸警衛として備後の兵士出張の図



家財を運び遠して市中の人民立退の図

八千余町の大町人の者人夫婦へ片里へもつたり家財をもたせ車力日雇へ

東西南北奔走市中のえぞ大きなる物を担ぎ運ぶ

さて市中いづれ高ぶさるも奚和後来の風俗のまゝ自然の体編のまゝ洗ひ清めの強人いまの体物の風体といふの外洗ひ足袋の浦賀及び結所の陣笠より洗ひ刷ひのちう走陸の汗ふみもちちう海へ果ろみ遅滞なく切ろう

国土安穏

辛土の実直ら感涙の余ゆ

「さても本月廿日浦賀久里濱より百ろ余の役小屋をさしらの足みく亜米の出船とうけ役けとあーこれ亜紀人達ーくれべきの日報八時ごろ報知とつゝく」

つゞき

義し役員ペルリ殿の熱せい二百人ばかり上陸あり其中央にペルリを真ん中にして久里浜のうら小屋さして参りうまさ小屋ちらつゝ金屏ぶ数十双毛せんと数百枚とあり

▲ゑのこと林大学その外二人森上下のうえみ陣羽織をちやくし森桃みかう急ぜいまその者よ玉王の出張とゆこーペルリのいらっしゃく波浪を

ゆきて亜人へ小屋ゑ今とへルリ待子ふうつその余ゑ平屋ゑ

▲門ゑ

久里浜の役小屋ゑ於て亜人と座接の図

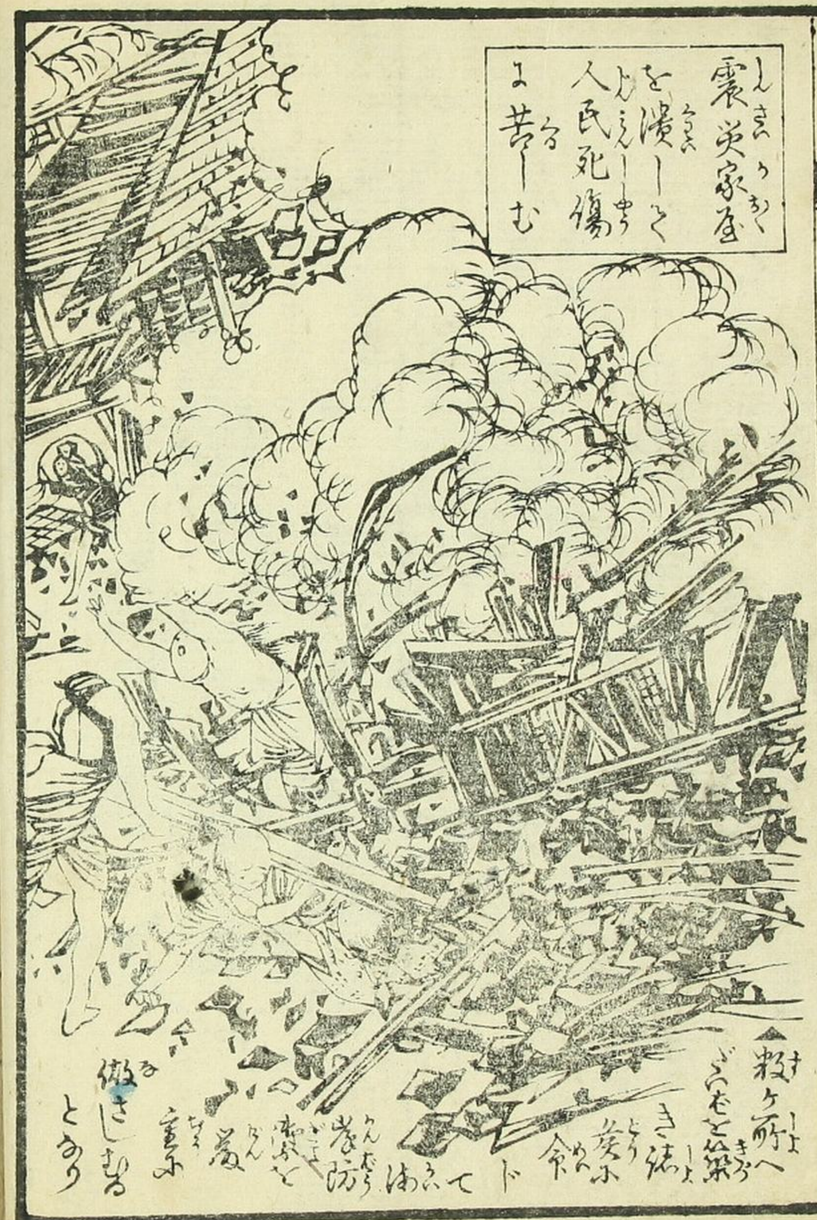
升戸和船

いらく我

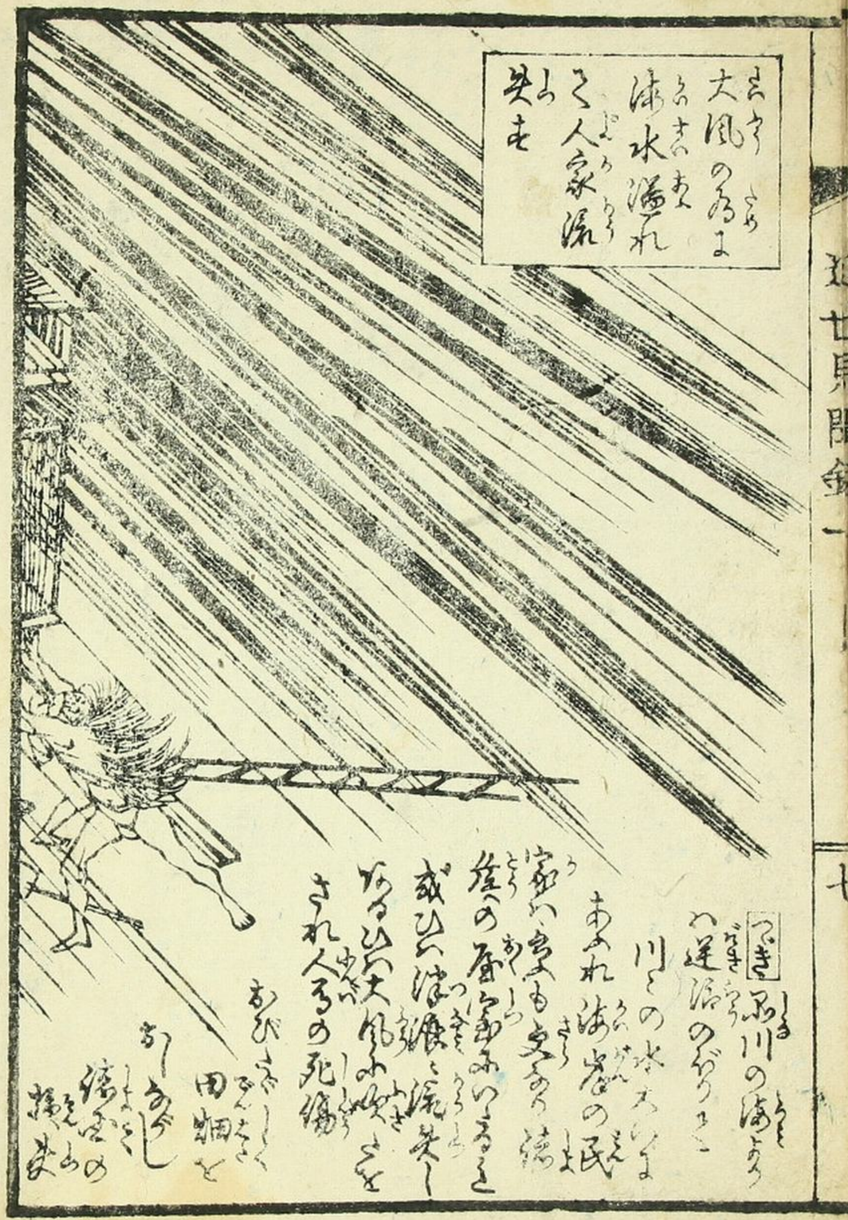
つゞき

隙所の登
笠を結有
司馬大評
定の図

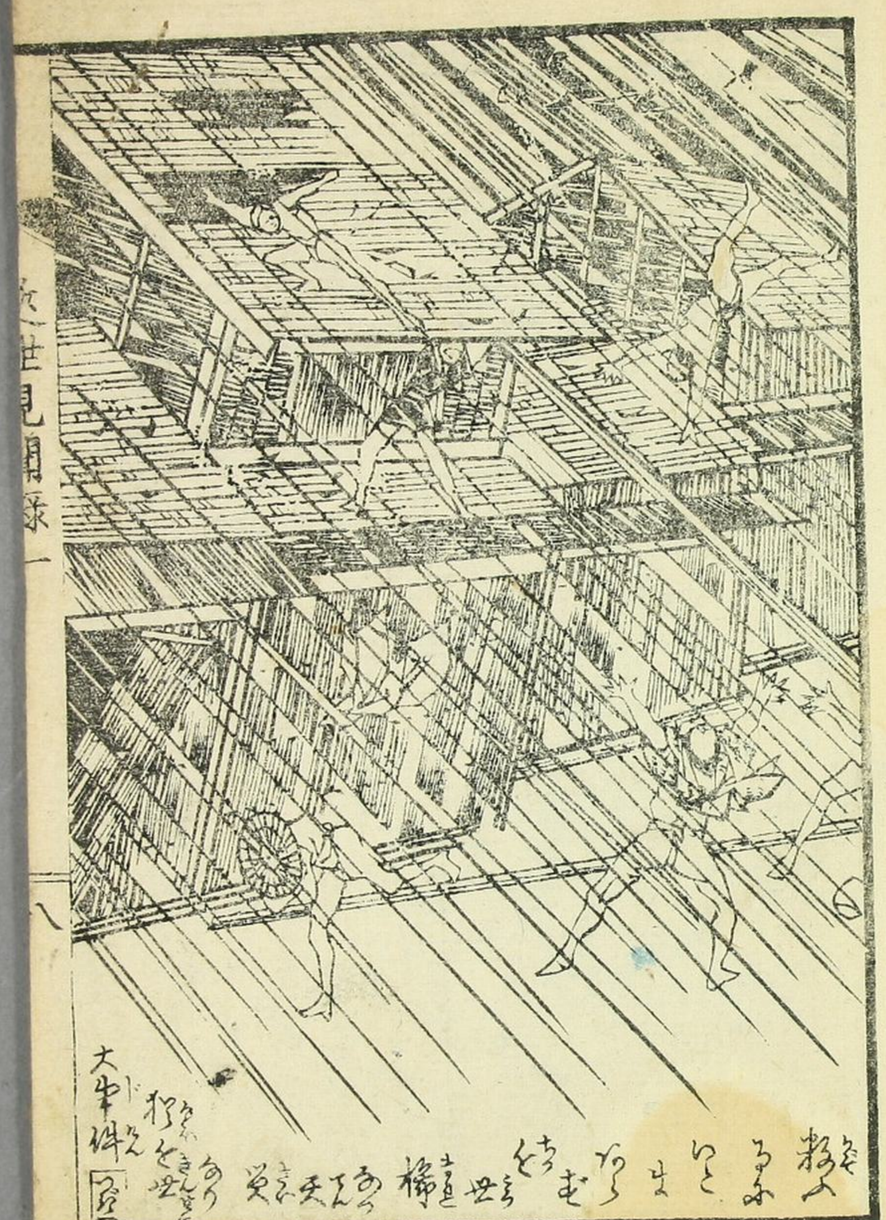
つぎ
はらざるぎの
はづん軍敗
云上多り
ゑの
問事軍の所も
あきば迄ーく
軍ふとう
ゆきさんとくふ
はせ爲ハ沒ル
はらもよ
さらあざえ
紀月を傍
あそ佐ゑの
佐ぜん向後の浦へ
入津へ乗船とのよへル
り出りのよしその日の
意ぞつハ見よとあつ
結るふへルりハ軍
ぎのふへルりハ出
見とあるむるふへルり日出かんぞ文れある
うへ定船の由日松ゑうとらふ和人
見とと海ぎ船三十日夢又陸こんへ軍
定

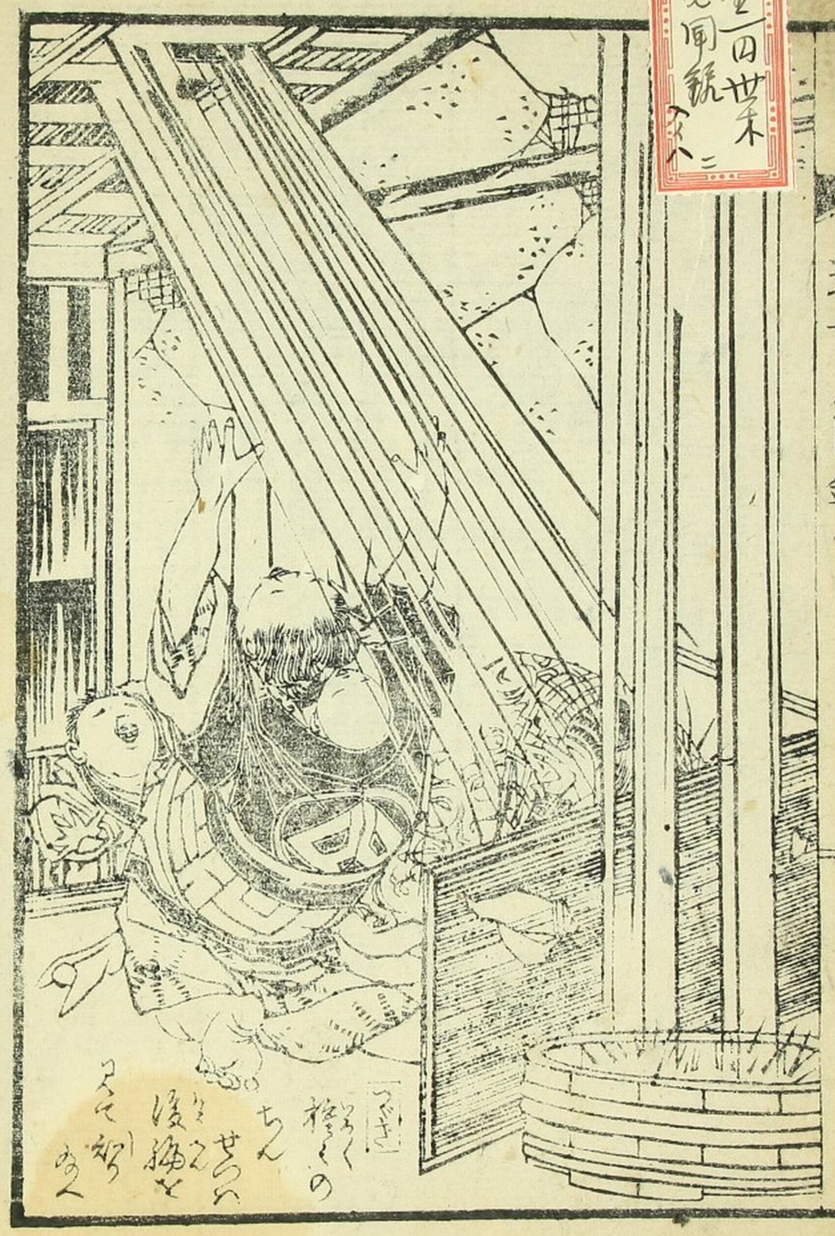

震災家屋を潰し人民死傷す苦しむ
救ケ所へ
ぶらぶと
き法
令
働さしむる
とかり

つゞき
の大ぢしん
又ふるまちの
大水
大地しん
山岳
海嘯
又江戸



つぎ 西川の海より
逆浪のゆゑ
川々の水大なる
あふれ海岸の民
家い多く流るゝ
屋の屋根のみのこる
或ひは海浪流来し
なるひは大船の
されくるの死骸
あゝ哀しく
田畑と
なし
流るゝの
失ス





金四世木見周銘 二

010190508655